

エチオピアにおける嗜好品植物「チャット (*Catha edulis*, アラビアチャノキ)」の 銘柄に関する研究

1. はじめに

チャットとは、東アフリカ高地に広く自生し、北東アフリカやアラビア半島で栽培・利用されるニシキギ科の常緑低木のエチオピアでの呼び名である。樹液にアルカロイドを含み、新鮮な若芽の葉や茎を噛むことで軽い覚醒作用が得られる嗜好品である。エチオピアでは古くから東部を中心としたイスラム圏の文化に組み込まれ、社会的な役割を果たして来た。効果を得るには新鮮な若芽である必要があるため生産地から長距離の流通が困難であったが、道路交通網の発達などによって生産地域から離れた都市で小売される嗜好品として、或いはコーヒーに代わる換金作物として広まり続けている。

チャットから得られる覚醒作用のことを人々は「ムルカーナ」と呼ぶ。ムルカーナが効いている間は空腹感や眠気、疲労感が軽減し、適度であれば会話が弾み、労働や勉強集中できるとされる。しかし、ムルカーナが深まり過ぎると極端に口数が減り動作も緩慢になり、不眠や食欲不振などを引き起こし、翌日以降にまで悪影響を残す。そのため強すぎるムルカーナは嫌われ、強すぎず弱すぎない状態が最もよいとされている。

2. チャットの種類と銘柄

チャットにはローカルな「品種」と呼べる分類がある。これは基本的に色の違いで、新芽の表面が真っ赤のものから中間色をはさんで一切赤色が混じらないものの3段階に分けられていることが多い。また、栽培地域ごとの土壌、気候など地理的要因や、農法の違いにより、栽培状態のチャットは樹形や樹高、芽や葉の形状などに大きなバラつきがみられる。そのため、収穫されるチャットは、色・形状の組み合わせの多様性は高い。これらに輸送距離や税金などの流通段階での要素が加わり、価格・強さ・苦味・鮮度・生産地などの情報を総合して消費者に提示される商品としてのチャットの名前を「銘柄」と呼ぶことにする。ある銘柄について含まれる情報の全てを知る必要はないが、初めての店でチャットを買う際などにはより知識のある方が有利に交渉を進めることができる。また、チャット消費中の手持ち無沙汰な時間には話題に上り、他のチャット関連の専門用語などと共に共有されている。本発表では首都アジスアベバで見られる銘柄のうちの一つ「ウォンドベレチェ」を取り上げるとともに、今回の調査で明らかとなった近年の変化を通して、銘柄のもつ意義について考えたい。

3. 首都アジスアベバの銘柄

銘柄名	価格(1 ブル=約 10 円)	色・形状	一般的特徴
アボ・ミスマル	50~60 ブル/1 束 (約 50 本)	中間色・約 40cm の芽	はっきり効くが後に残らない
ウォンドベレチェ	40~46 ブル/1 束 (約 100 本)	中間色・約 25cm の芽	強すぎず後に残りにくい
ウォンド	16~26 ブル/1 束 (約 120 本)	中間色・約 20cm の芽	強すぎないが後に残りやすい
ガラムソ	20~22 ブル/1 束 (約 70 本)	緑~中間色・約 40cm の枝と芽	苦味が少ないのに強い
バルダール	6~8 ブル/50g	中間色・芽の先端のみ	噛みやすいが危険なほど強い
グラゲ	交渉により増減、3 ブル~	赤・約 60cm の枝と芽	苦いのだが強く、何より安い

調査 2008年8月・12月 (各7日間)

今回の調査で確認できた銘柄は以上の6つであった。2002年からあった2つの銘柄が見られなくなった代わりに、北部の都市バルダール周辺から量り売りで噛める部位のみを売る「バルダール」という銘柄が新たに登場していた。聞き取りによると、2008年4月にウォンドベレチェを出荷する南部の地域ウォンドゲネットで大規模な民族

紛争が起こり、3日間チャットが品薄になったのに対応して一気にシェアを拡大したという。

都市には、大小のチャット小売店や嘯むための空間を提供する店が集まった地区「チャット街」が何箇所かある。アジスアベバには大規模なチャット街だけでも10箇所以上あり、小規模な小売店の集合ならば数え切れないほどにある。複数の小売店が集まっても扱われるチャットの銘柄は偏っていることが多く、1つのチャット街では全ての銘柄を見ることができないことが多い。一方、小売店は多くの場合1軒が2つ以上の銘柄を扱っていることが多い。

アジスアベバで週に一度以上チャットを嘯む消費者たちは、これら6つの銘柄については基本的に知っていて、質の良し悪しまで語ることが多い。だが実際には、いつもの店でいつものチャットを買うことを求めている様子が伺え、たとえこちらからいつもの銘柄よりも高価で良いとされる銘柄の購入を申し出ても拒否されるケースまで複数回見られた。チャットを嘯む部屋を併設した小売店では多くの客が顔なじみの固定客である。彼らは店主と親密になると、質の良い束の取り置きや、特殊なタイプを仕入れてもらうなどの便宜を受けられるようになる。

4. ウォンドベレチェ

4-1 ウォンドゲネットとチャット

「ウォンドベレチェ」とはウォンドゲネットのベレチェという集落周辺のチャットという意味である。しかし、ウォンドゲネットにはベレチェとバッシヤの2つの集落にチャット市があり、アジスアベバまで出荷しているのはバッシヤのチャット市であるため、この名前には「ウソ」がある。

ウォンドゲネットは全般に温暖な気候で湧き水や川が多く、農耕に適した土地とされ、種々の果物などの農作物の質が良いことで知られる。また、温泉が湧いており、エチオピア最後の皇帝ハイレセラシエが別荘地にしていたために観光地としての知名度も高い。このウォンドゲネットでチャットの栽培が始まったのが約50年前、特に湧き水が集中していたベレチェ集落周辺であった。貴族や側近の中に高値売れたというこのチャットは、ウォンドゲネットの気候と豊富な水で大変に瑞々しく上質なチャットとして喜ばれ、一般人が観光に来ることなどできなかった当時から、ウォンドゲネットのベレチェチャットは多くの人々に知られることとなった。以後ベレチェ以外の農地でも栽培・流通が始まり、約30年前には約200km北の大都市ナザレトからの大規模な買い付けを受けるようになり、10年前にはアジスアベバに展開、ウォンドゲネットのチャットと言えばベレチェという噂に乗じてウォンドベレチェの名を定着させた。だがこの経緯も、多くの人々が行き交うようになった現在では、アジスアベバでも知られる銘柄にまつわる「逸話」となっている。

4-2 アジスアベバへの流通ルート

ウォンドゲネットから銘柄「ウォンドベレチェ」としてアジスアベバへ向かう流通過程では、銘柄としての質を維持するための活動が多数みられる。中でも生モノであるチャットの中でも特に弱い柔らかな新芽ばかりである銘柄であるため、鮮度を維持するための輸送用包装技術は特徴的である。

また高級銘柄であるが故に、ウォンドゲネットに隣接する町トゥラのチャット市に「ウォンド」という銘柄名、見た目、包装方法を似せたチャットを出され、実際に詐称されるケースもあるという。

5. 総括

「銘柄」は消費者にわかりやすい選択肢を与えるとともに、固定客化すれば毎回同じであろうという安心感を与えている。また生産者・流通関係側に大きな品質のずれを許さない規制のようであるが、その枠内の品質を保てれば安定した収入を約束するものでもあり、相互にとってメリットになる共通の基準の役割を果たしていると考えられる。